

中国口語史研究と敦煌文献

中國口語歷史研究與敦煌文献

玄 幸 子
Yukiko Gen

發現敦煌文献之後，變文資料是經過了半箇世紀之久，纔於五十年代被整理出來的。第一次出版的關於敦煌變文的專著，便是《敦煌變文集》。在此之后中国口語研究逐漸盛行起來了。此稿在回顾当时的口語研究狀況的同时，通过討論兩篇代表專著——太田辰夫《中國語歷史文法》及王力《漢語史稿》来阐明敦煌文献与口語研究之間的關係。

キーワード

中国口語史研究（中國口語歷史研究）、敦煌變文（敦煌變文）、『中国語歷史文法』（《中國語歷史文法》）、『漢語史稿』（《漢語史稿》）

1 はじめに

中国語に限らず口語を対象とした言語研究自体がさほど長い歴史を有するものではないことは周知の事実である。また、一般的にいえば言語学における口語研究というのは現在（その時点）を共通時間軸とした地域の広がりによってなされる共時研究である。なぜならば、口語に相当する話し言葉（spoken language）は書き言葉（written language）に対する概念であり、また文字言語に対する音声言語と理解されており、現代のような録音といった記録手段や音声記録媒体などが皆無の時代において音声は文字と異なり発生と同時に消滅し何も残してこなかったからである¹⁾。

よって言語変化を研究する歴史言語学は畢竟文字文献に依存せざるを得ず、言語史料において大きな制約を受けざるを得ないのは、自明の理であるといえよう。そこでソシュール以前が文献学に基づいた言語学を主としていたのに対して、ソシュール以後の通時共時の区別を明確に捉えた20世紀の言語学ではその時点で把握しうる言語の共時の研究へ主流が移行していったのは当然であろう。

本稿ではこのような言語学の潮流において、中国口語研究がこれまでどのような足跡をたど

ったのかを明らかにする。その上で、とりわけ敦煌文献が口語史研究においてどのような意味をもったのかを考察し、日中の中国語歴史研究の代表的専著である2冊をとりあげ、両者間にどのような組み合わせの差違があったのか、口語史研究の草創期の諸相を見ていくことにする。

2 中国における中国口語研究

まず当然のことながら中国語（漢語）においては文言と白話の二重言語使用の悠久の歴史があり、研究対象となるのは常に文言であり続けたという中国語特有の言語事情を踏まえておく必要がある。

よって中国語における特異性とは大きく2つ考えられる。

その1：文語と口語の二重言語の悠久の歴史を有すること

その2：表記手段としての文字、つまり漢字が表音文字ではないこと²⁾

また伝統的中国語（漢語）研究ともいえる小学は言語自体を研究するというよりもむしろその表記法である漢字を対象とした学問であった。漢字学の基本となる形音義に対する研究はそれぞれ後漢許慎『説文解字』、隋陸法言『切韻』、前漢編著者未詳『爾雅』をその最初の専門の著作とし、文字学、音韻学、訓詁学へとそれぞれの分野でさらに拡張を続け清代考証学へと結実するのであり、なんとすでに2200年以上の歴史を有している。

問題は、この小学が対象としたのが文言であるという点である。とりわけ伝統的正当な学問としての経学の目的は四書五経を正しく解釈することであり、時代を経るにしたがって本文に対する各時代の注疏が加えられて雪だるま式に分量内容が膨れていくことはあれども本文自体は書き換えられることなく忠実に世に伝えられてきたのである。この姿勢は近現代においても揺ぐことなく継承された。

中国語文法研究の黎明とされる馬建忠『馬氏文通』（1898）は西洋の Grammar の概念を取り入れラテン語文法に照らして中国語文法を体系的に捉えようとした初めての文法書ではあるが、分析の対象とした資料が韓愈を除き『論語』『孟子』『大学』『中庸』『春秋』『史記』『漢書』などの先秦兩漢の古文であった。時を経て理解できなくなった点に注釈を加えるという従来の方法（文字訓詁学）を脱却し、新たな文法という概念を取り入れて解釈を加えたという点において中国語学史上記念碑的な意味を持つのではあるが、正当な学問の対象となるのは由緒正しき文言史料であるとする古来一貫した姿勢は微動だにしなかったことがみてとれる。

むしろ中国において口語研究の視点が全くなかった訳ではない。共時言語の記述では前漢揚雄『方言』が早期にみられ、隋陸法言『切韻』の序文にも地域による言語音の差異を記録しており、また語彙面では“寧馨”“阿堵”など俗語俚言としてその時々言及されてきたのである。ただ、口語を研究対象の主として取り上げ学問として総合的に研究することは、20世紀まで待たねばならなかった。

その直接の契機となったのは、1917～1918年に胡適等が中心となり雑誌『新青年』を推進母体として展開した白話文学推進運動（文学革命）であり、また清末から唱えられ民国政府に継承され言文一致と国語統一を目的とした国語運動であった。胡適の『国語文法概論』（1921）を嚆矢として王應偉『实用国語文法』（1921）などの“白話文法”に関する専門書が出たのち、黎錦熙『新著国語文法』（1924）によってようやく全面的に口語を対象とした体系的研究が世に出ることになったのである。黎錦熙のこの書は自身の教学実践で蓄積された基礎の上に日常使用する大量の口語をその材料として規則・構造を帰納してまとめたもの³⁾であり、系統だった白話語法の著述として国語運動を推進させるにも大きく寄与した。また、それ以前の研究対象となりえなかった白話（口語）を正面から研究対象として取り上げた点が大きく評価されている。

これ以後、楊樹達『高等国語文法』のように馬建忠『馬氏文通』の例文の解釈に訂正を加え新たに正しい解釈を示す文語文法の研究成果⁴⁾も見られるが、研究対象の重点は現代口語へと大きく移行していくのである。

上記の如き研究動向の背景には所謂洋行帰りのグループが大きく貢献したことは言うまでもない。中でも、時代の寵児ともいえる趙元任は後に自身の50年の学問を“A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE”（1968）へと集約させていくが、これを以って中国口語研究の土台が固まったとみなしたい。つまり言い換えれば、中国語文法研究の対象が現代中国口語であることが当たり前となったのである。

さて、現代中国口語研究に関しては上述の通り20世紀前半から飛躍的に発展していくのであるが、中国口語の歴史的研究についてはどうであろうか。四十年代以降の王力・呂叔湘・高名凱のそれぞれの著作『中国現代語法』（1941）『中國文法要略』（上巻初版1942）『漢語語法論』（1948）のうち、『中国現代語法』はその書名の通り現代中国口語の語法に関する著作であるが、『中國文法要略』『漢語語法論』は文言と白話の例を挙げて時に対比しながら解説しており、一部歴史的考察を反映した著作であるといえる。が、明確に歴史語法を謳った最初の著作は王力『漢語史稿』（1957-58）である。王力は前述の『中国現代語法』「甚麼是中國現代語法？」のなかで次のように述べている。

現代有所謂文言文和白話文的分別。表面上看來，文言是古代語，白話是現代語。其實單就詞匯而論，已經界線不清；若就語法而論，則現代人寫出的文言文，一百個當中總有九十幾個是不懂古代語法的，他們只知道依照現代語法而運用多少古代詞匯。因此，咱們實在不必有文言文和白話文法的分別。真正能合古代語法的文言文，我們索性把它當作古代文章看待，將來另著的《中國古代語法》或《中國語法史》中，自有它的地位；至於一般報紙雜誌上的文言文，既然大多數是依照現代語法而寫的，我們就不必另眼相看。

（現代には所謂文言文と白話文の区別がある。表面的に見て、文言は古代語であり、白話は

現代語である。ところが実際は語彙についてのみ言えば、その境界線が明確ではなく、語法について論ずるならば、現代人が書く文言文は百のうち九十数個が古代の語法を理解しておらず、ただ現代語法に照らして多少の古代語彙を運用することを知っているだけである。よって実際文言の文法と白話の文法を分ける必要はない。古代語法に合う正しい文言文は、いっそ古代の文章として扱い将来本書と別に著述する《中國古代語法》あるいは《中國語法史》の中でおのずとその場所を得るだろう。一般の新聞雑誌上の文言文にいたっては、その大多数が現代語法に照らして書かれているからには、別に取り立てて重視するには及ばない。)

王力はここで予告した通り書名こそ異なるが16, 7年後に『漢語史稿』を完成させたのである。

また注目に値する著作として、これに先立って呂叔湘『漢語語法論文集』(1954)も出版されているが、太田辰夫もその引書目録を参照している⁵⁾。1987年に『中国語歴史文法』の中国語翻訳本が出版されるに及び「漢譯本序」のなかで太田辰夫自身が『中国語歴史文法』が『漢語語法論文集』から啓発を受けてまとめたものであり、書名もその序文中にある「近代漢語歴史語法」を少し変えて採用したと述べている。

この2大著作以後、歴史語法に関する著述は増え続けるが、一旦ここでおき、日本における状況を次に概観してみよう。

3 日本における中国口語史研究

古来より漢字文化圏の一地方として認め得る日本においては、時代ごとに通訳の必要性などから漢語口語に対する認識はあったであろうし、近代では徂徠学派の俗語研究や江戸時代に大いに流行した白話文学を読むための工具書、長崎通事に関連する唐話資料なども視野に入れば言及すべき事項は尽きない。さらに現代では中国語教育史におけるテキスト及び工具書も当然口語資料として考慮されるべき対象である。

ただここでは、口語史研究の概観ということに焦点を当てるため、日本内外で高い評価を得ている太田辰夫『中国語歴史文法』(1958)を出発点とすることになる。まず、日本におけるその前後の状況を確認していこう。

日本においても古来より中国から伝えられた経書典籍を正当な伝世資料とする一方、水滸伝や西遊記などの白話小説などは俗資料としてとらえられ中国同様資料に雅俗の別がある。所謂素読が明治から大正、昭和の初めまで行われており教養人の素養は叩き込まれた漢文の有無で評価されることが長らく行われてきた。例えば夏目漱石は英文学者である一方、その作品のいたるところに「梁上の君子」といった漢文臭が認められるのは同時代人にとっては当然のこととしてとらえられたであろう。

日本での中国口語史研究の第一人者である入矢義高先生も素読の世代といえよう⁶⁾。その入矢先生が口語読解に随分苦労された逸話を1986年5月31日に第35回東北中国学会第1分科会での「中国口語史の構想」という題の講演で紹介されている⁷⁾が、口語研究の発端が元曲会読であったこと、ルース・佐々木主編『臨濟録』英訳⁸⁾の仕事に関連して唐宋の口語辞典作成の依頼を受けたことなどを紹介し、その後次のように続けられた。

……広く申して中国語史についての研究は、むしろ日本の方が先鞭をつけていたわけ
して、ご承知のように太田辰夫さんの『中国語歴史文法』という、これは一九五八年に出
たものですが、記念碑的な著述が公にされました。現段階では多少修正を要する所が
ありますけれども、この時期としてはこれは、この方面の分野での基礎を築かれた、立派なお
仕事だと思います。太田さんのこの本は、欧米の学者の論文でもしばしば引用されるぐら
いで、いい意味で古典的な、しかも今もその生命の衰えない、立派な本だと思います。(54
頁)

講演では、この後張相『詩詞曲語辭滙釋』、呂叔湘の論文などを紹介し、蔣禮鴻『敦煌變文字義
通釋』、志村良治『中国中世語法史研究』に言及したのち、『詩詞曲語辭滙釋』の方法論に対す
る批評⁹⁾をし、ご自身の取り組みへとお話を進めていかれたのだが、多くの例を挙げながら口
語史研究はどうあるべきかという指針を見事に示されている。文白の異同から、口語における
同類の表現が時代を経てどのように変遷してきたか、時には語彙のみならず修辞法にかかわる
表現までを取り上げて解説をされたのは、何度読んでも貴重なご教示を得た気持ちになる。

……文語と口語をどう見分けるかという質問がきつと出るだろうと思っていたんですが、
幸い、とっては失礼ですけども、出なかったのですが、口語の歴史は、ふつうの文語
の歴史とはまるっきりちがっているんですね。(58-59 頁)

この「口語の歴史は文語の歴史とまるっきり違っている」という表現は、素読の世代でありな
がら口語史料を着実に読み進めてこられた先生ならではの一言だと思われる。このように体得
できる学者は稀であろう。ただ残念ながら、『禪語辭典』の監修をされたものの、白話辭典につ
いては志半ばに逝ってしまわれた。

さて、王力『漢語史稿』(1957-58)とほぼ同時期に太田辰夫『中国語歴史文法』(1958)が
世に出たのであるが、口語文法の最初の著作としては太田辰夫『中国語歴史文法』(1958)が
真っ先に挙げられ、「中国語史についての研究は、むしろ日本の方が先鞭をつけていた」と言わ
しめるその理由が何か、次に検証してみよう。

4 『漢語史稿』(1957-58)における史料の扱い

ここで再度王力『漢語史稿』での漢語史構築のためによりどころとした資料と口語に対する見解を確認しておこう。上冊「第1章緒論 第4節 漢語史的根拠」において次のように述べる：

首先要説：現代活生生的口語就是漢語史的最好的根拠。(まず、現代の生き生きとした口語こそが漢語(中国語)史のよりどころとなるのだと言っておく必要がある。)

これに続き、方言の有効性を説明した後、歴代の字書・甲骨文や金文資料・漢字資料・韻書韻圖・歴代の韻文資料・姓名地名・周辺の日本、朝鮮、ベトナム漢字音・音訳された外来語などを次々に挙げ最後に以下のように述べる。

文字は語言的代表、因此、古代一切用漢語寫下來的文字記載、對漢語史來說、都有作為資料的價值。但是特別值得注意的是接近口語的作品。就先秦來說、詩經的國風就是民間口頭文學的記載；論語也可能是孔門弟子所記錄下來的當時的口語。當然、其他還有許多接近口語的作品、例如易經的彖辭和象辭就有許多俗諺在內。直到漢代、許多作品還是接近口語的。史記漢書裏面有很多生動的描寫、也大多數用的是活生生的口語。劉知幾史通中所批評的“年老口中無齒”，也正是忠實地反映口語的地方。魏晉的文章也和口語距離不遠(如抱朴子)。自從南北朝駢文盛行以後、書面語和口語才分了家。只有世說新語、顏氏家訓等少數散文作品是接近口語的、其他還有一些零篇、如任昉的奏彈劉整等。(文字は言語を具現化する。そこで、古代の一切は漢語で書きとめられた文字による記載である。漢語史についていえば、すべて資料たる価値を有している。ただとりわけ注意するに値するのは口語に近い作品である。先秦についていえば、『詩經』の國風はほかでもなく民間の口頭文學を記載したのであり、『論語』もまた孔子の門下の弟子たちが記録した當時の口語であろう。もちろん、他にもさらに多くの口語に近い作品がある。例えば『易經』の彖辭と象辭には数多くの俗諺がその中に含まれ、漢代になると『史記』や『漢書』の中にも眼前に絵が繰り広げられんばかりの活気に満ちた多くの描写があるが、これもまた大多数に用いられているのは生き生きとした口語なのである。劉知幾『史通』の中で批判されている“年老口中無齒”¹⁰⁾もまた忠実に口語を反映したところであろう。魏晉の文章もまた口語に遠からず(例『抱朴子』)、南北朝に駢儷体が盛行してから後に、書面語と口語がようやく分かれたのである。『世說新語』『顏氏家訓』など少数の散文の作品だけが口語に近く、他にも任昉の『奏彈劉整』などの小作品がいくつかある。)

続いて、漢代以降の口語資料について述べるが、詩歌が散文より口語に近いとし、古詩十九首

でさえも平易で通俗であるという。さらに六朝の民歌が漢語史の主要なよりどころとなるとし、唐代の文と詩ではその口語の程度にかなりの隔りがあることを指摘、ところが宋代だと口語は詩ではなく詞に探すべきであり、元代だと詞ではなく曲に探すべきだとする。唐代の変文、宋代の話本、明清の小説はいずれも漢語史の極めて貴重な材料であり、隋唐以後の仏教の語録、宋以後の儒家の語録もまた参考にできる。散文を研究する目的は漢語史について言えば、ある時代の語法と語彙を研究することであるが、韻文を研究するに至ってはそれ以外に韻母と声調を研究することもできる。また、声母についてすら発見されうるとして六朝人の好んだ「反語」¹¹⁾や「双声詩」、史書における「雙關語」や忌避の例などからも古音を考察できるとする。¹²⁾

以上のように王力は語音、語法、語彙について考えうる口語の資料を時代を追って列挙し、『漢語史稿』中冊では実際にこれらの資料から用例を取り上げて論を展開している。ただ、『詩經』から『毛沢東選集』まで一つの線上で一気に述べ、口語史として位置付ける点はいささか無理があるように思われる。

5 『中国語歴史文法』（1958）における史料の扱い

では、太田辰夫の史料の扱いはどうであろうか。まず、「はしがき」において「本書は現代中国語文法の歴史的研究である。」と明確にことわっている。さらに「なお前述の如く本書は現代語文法を歴史的な立場から説いたものであるから、現代語と直接的な関係のない古代語だけの問題については、ほとんど触れていない。それは、本書が、古代語と現代語とを平面的に比較することを目的とするものではなく、あくまでも現代語を説明することに焦点をしばったものであるからである。」とある。『漢語史稿』と方針が根本的に異なっていることが確認できる。

そのうえで「あとがき」に「言語の歴史的研究にあたって、最も大切なことは資料の選擇である。資料の選擇如何は研究の結果を決定的に左右する。」という歴史研究における基本姿勢を述べて、これを守らなかった場合の弊害・誤りを具体例を挙げて検証している。

そして資料を「同時資料」と「後時資料」に分けることを提唱し、そのうえで〔唐以前〕から〔清〕までの各時代における代表的資料を解説している。さらに続けて引用書目録を附すが資料の出所を詳細に記している。

本稿に関連する〔唐、五代〕について解説部分を引用すれば、「全唐詩」の重要性を説いたのに続けて、

……次に同時資料として最も重要な敦煌本の研究は近時とくに進歩し「敦煌變文集」や「敦煌曲詞子集」は従来公表されていたものに比べれば格段の進歩をみせている。

とあって1957年に出版された『敦煌變文集』を早速参照していることがわかる。

また、隋以前の資料に周易や尚書などを引くが、そもそも王力とは異なり、どこにも口語歴史文法とは記載していない。太田辰夫にはこれとは別に『中國歷代口語文』の著作があり、「凡例」で「参照されたい」とある。同書の「はしがき」を読むと、太田辰夫の口語に対する認識をある程度確認出来る。一部引用すれば次のとおりである。

本書に採録したような文章を口語文とよぶことに、あるいは疑問を持つ人があるかも知れない。しかし、口語文とはいっても、それは口頭語そのまま、つまり日常の会話そのまま、はじめから終わりまで貫いている文章ということではない。そのような文章、つまり地の文と対話の文とを区別せず、同じ調子でダラダラと書いた文章は中国には存在しない。そのような文章はよい文章ではないからである。

そして、老舎の《離婚》を例に挙げ、前半の叙事部分は堅い簡潔な文章であるのに対して後半の対話部分が全くの会話そのものであることを挙げて《記言》の文章であるとする。そして、

《記言》の部分に口頭語が反映しているならば、《叙事》の部分に反映が不十分でもそれは口語文とよばれるべきものなのである。ことに中国においては、文語を共通語(口頭語)として用いようとする努力がつけねになされたから、《記言》の文章にも文語の侵入を許すことになる。中国の文章、ことに口語文の特殊性はもっと正確に理解されなければならない。

と、まとめてある。

6 中国口語史研究における敦煌文献の意味

中国口語史研究黎明期の日中の状況とその史料の扱い方の差をみてきたわけであるが、その中で敦煌文献が持つ意味を改めて確認しておこう。

敦煌文献に関しては敦煌学という一つの学問ジャンルを作り上げるほどの資料であり、その発見にまつわる経緯はあまりにも有名なので贅言を避ける。あらゆるジャンルに大きな影響を及ぼしたその史料の価値についても今更ながら取り立てて説明する必要もなからう。ここでは中国口語史研究におけるその意味と史料価値について述べる。

悠久の中国語の歴史において口語がその研究対象として正式な地位を得たのが20世紀に入ってからであることは先に述べたとおりである。また当然のことながらその対象となったのは現代口語であったことも確認済みである。では、次に口語の通時研究を実践しようとするれば対象となる史料が必要になるが、中国では俗語俗文として意識して排除してきた歴史があり、まとまった史料を得ることは不可能であった。よって現代を始点としその源流をさかのぼる太田辰

夫式アプローチが至極有効な方法であることがわかる。現代語の分析を通して、断片的に残る史料を辛うじてつなげていくという手法でしか中国口語史の研究は実現できなかったのである。

敦煌文献の発見は、このような限界を打ち砕く契機となった。書写された当時のまま後世の手が加えられることなくそのまま姿を現した膨大な資料群は第一級の一次資料であり太田辰夫の所謂「同時資料」であった。無論敦煌文献には様々な分野の文書が含まれており、そのすべてが口語資料というわけではないが、各分野の資料の文字の誤写ですら当時の通行の字体、実際の字音を考察する材料となり得る。

さらに敦煌文献の一ジャンルである俗文学の資料「変文」は「絵説きの文体」であり、狭義には講釈師が絵を示しながら講釈をした台本の口語文資料であり、広義には当時の俗文学資料全般を指すタームとなった、本来ならば決して残されることのなかった史料群である。これらを詳細に研究することを通じて初めて当時の口語の実態を再現することが可能となったのであり、ここを出発点にし拡張していくことで中国口語史研究がようやく実現しえたといえよう。つまり、敦煌文献の発見無くして中国口語史研究はここまで発展しなかったといっても過言ではない。

敦煌文献が中国語史研究に多大な影響を与えたことは、その後の研究成果に如実に現れている。まず語音についての研究は、佚書となっていた韻書の発見を契機に『十韻彙編』に切韻系韻書がまとめられた。さらに口語音ということに焦点をあてれば、漢藏対音資料さらに別字資料から音系を再構した羅常培著『唐五代西北方音』（1933年 国立中央研究院歴史語言研究所）が真っ先に挙げられよう。韻書ではなく対音資料から当時当地域の語音の實際を考証するという研究法は、西夏語と漢語の対音資料を使って同様の方法で考証した李范文著『宋代西北方音』（1994年 社会科学院）などへも継承されている。

次に変文についての紹介・考証は狩野直喜「支那俗文學史研究の材料」（『芸文』1916年）を嚆矢として現代までに相当数の研究論文、専著がある。その多くがテキスト校訂にかかわるものであるのは、資料実見の困難と写本という資料の特殊性に起因している。よって資料公開及びテキスト整理が進むに従い、語彙研究では、蔣禮鴻著《敦煌變文字義通釋》が1959年に初版出版されて以降、顔洽茂の整理による最終版が2016年に出版されるまではほぼ半世紀の間増改定が繰り返され、語法については吳福祥著《敦煌變文12種語法研究》（2004年、河南大学出版社）などの専門の著作も近年になって出版されるなど、ようやくまとまった成果を確認できる段階になってきている。変文研究史などを詳細に記述することは別稿にゆずり、ここでは口語史研究の草創期において敦煌文献がどのように扱われたのか、その實際を次に見ていくことにする。

7 敦煌文献の利用状況

太田辰夫と王力の敦煌文献(変文資料)に対する認識の差をまず確認しておこう。『中国語歴史文法』では敦煌文献が「同時資料として最も重要」と位置づけられているのに対して王力では先述の通り『詩経』の国風から始まり、宋代の話本から明清の小説へと続く流れの一部として取り上げているに過ぎない。

実際『中国語歴史文法』では変文資料の中から全51作品から101の用例を抽出し分析しているが、『漢語史稿』(中冊)では以下の23作品41例を挙げているに過ぎない¹³⁾。

- 1 權時作个慰安人。 維摩吉講經文 (p.243)
- 2 令伊旦夕添香, 日夜禪堂暖熱。 維摩吉經菩薩品變文乙 (p.270)
- 3 悶即交伊合曲, 閑來即遣唱歌。 維摩吉經菩薩品變文乙 (p.270)
- 4 直欲危他性命, 作得如許不仁。 燕子賦 (p.271)
- 5 ……問我無言向對他, …… 維摩吉經菩薩品變文甲 (p.271)
- 6 牟尼這日發慈言。 維摩吉經菩薩品變文 (p.283)
- 7 這個修行是道場。 維摩吉經菩薩品變文 (p.283)
- 8 這賊爭敢輒爾猖狂? 張義潮變文 (p.283)
- 9 耶孃甚處傳書覓? 敦煌零拾雀踏枝 (p.293)
- 10 兄且如何出得身? 季布罵陳詞文 (p.302)
- 11 卒倉沒人關閉得。 大目犍連變文 (p.302)
- 12 旂下依依認得真。 季布罵陳詞文 (p.303)
- 13 直欲危他性命, 作得如許不仁。 燕子賦 (p.303)
- 14 太子既生之下, 感得九龍吐水, 沐浴一身。 八相成道變文 (p.303)
- 15 目連雖是聖人, 煞[嚇]得魂驚膽落。 大目乾連冥間救母變文 (p.303)
- 16 王郎才見公主面, 唬得魂魄膽飛颺。 醜女緣起變文 (p.303)
- 17 感得天下欽奉, 百姓依從。 茶酒論 (p.303)
- 18 太子作偈已了, 即便歸宮。 八相變文 (p.305)
- 19 思惟既了, 忽於眾中化出大樹。 降魔變文 (p.305)
- 20 喫了張眉豎眼, 怒鬪宣拳。 茶酒論 (p.306)
- 21 今既償了, 不得久住。 董永行孝 (p.306)
- 22 便與將絲分付了, 都來只要兩間房。 董永行孝 (p.306)
- 23 二人辭了便進路, 更行十里左右。 董永行孝 (p.306)
- 24 呢雖萬種作了, 鳳凰要自難漫。 燕子賦 (p.306)
- 25 示現皆生佛國, 看了却歸天界。 八相變文 (p.306)

- 26 任伊鐵作心肝，見了也須粉碎。 維摩吉經菩薩品變文（p.306）
- 27 皇帝舍德收勅了，君作無憂散憚身。 季布罵陳詞文（p.306）
- 28 盡頭呵責死屍了，鐵棒高臺打一場。 地獄變文（p.306）
- 29 作此語了，遂即南行。 伍子胥變文（p.306）
- 30 煞〔殺〕子胥了，越從吳貸粟四百萬石。 伍子胥變文（p.306）
- 31 余亦不是件茄之子，亦不是避難之人。 伍子胥變文乙（p.355）
- 32 大杖打不死，三具火燒不煞。 舜子至孝變文（p.372）
- 33 不把庭前竹馬之騎。 變文（p.413）
- 34 莫將天女與沙門，休把眷屬惱人來。 變文（p.413）
- 35 娘子被王郎道着醜貌。 醜女緣起變文（p.429）
- 36 蹤有衰蓬欲成就，旋被流沙剪斷根。 王昭君變文（p.429）
- 37 其時被諸大臣道：“大王！太子是妖精鬼魅……”。 八相成道變文（p.433）
- 38 令母在後設齋供佛。 大目乾連冥間救母變文（p.439）
- 39 逢師僧時，遣家僮打棒。 目連緣起（p.439）
- 40 旂下依依認得真。 季布罵陳詞文（p.443）
- 41 感得九龍吐水，沐浴一身。 八相成道變文（p.443）

王力の“現代活生生的口語就是漢語史的最好的根據（現代の生き生きとした口語こそが漢語（中国語）史のよりどころである）”というとらえ方自体は太田辰夫と機軸を一にする考え方であり中国語歴史研究の正しい方向を示しているが、問題はこのようなとらえ方がどこから生まれ、研究を推進するためには何が重要であるのかについての認識が示されていない点にある。

実際上記の用例を詳しくみていくといくつかの疑問が生まれる。まず、すぐに気づくことであるが、時に変文とのみあって、どの作品を出自とするのかわからない例がある。また同名の作品に甲乙の別を附している場合とそうでない場合などの不統一もみられるが、恐らく一部を周紹良『敦煌變文彙録』（上海出版公司）によったためであろう。これは1954年に第1版が出版され、1955年に増訂本が出されたが、誤りが多くほとんど利用されることはなかった。よって1957年に出版された『敦煌變文集』を敦煌俗文学研究の出発点とみなすのが現在の共通認識である。本稿では『漢語史稿』（中冊）については1958年当時の状況を見るために1958年4月に出版された第1版から全用例を抽出したが、王力は当時恐らく『敦煌變文集』をほとんど参照していなかったようである。

他方『中国語歴史文法』は1957年10月15日の序文があり、奥付は1958年5月29日第1刷発行となっている。また、引書目録には『敦煌變文集』を採用せず、オリジナルの資料番号でまとめられている。先述の通り太田辰夫は敦煌本の近時とくに進歩した研究成果として「敦煌變文集」や「敦煌曲詞子集」を挙げており、当時出版されるやすぐに参照したことが知れるが、

そのうえで敢えてオリジナルの写本から用例を抽出している。これは、当時敦煌資料を利用するのに日本が中国よりも多少便利な状況にあったことも反映しているであろうが、何よりもみることができる場合には必ずオリジナルを確認するという太田辰夫の研究姿勢を如実に表しているといえよう。

以上、具体的に敦煌文献の用例の扱い方を見てきたが、両者を決定的に分かつのは、史料に対する妥協のない厳しい姿勢であったことがわかる。そしてこの姿勢こそが、中国口語史研究を進めるうえでの最も重要かつ基本的要素であることは言うまでもない。

8 まとめ

以上、1957, 8年の敦煌変文資料を中心とした当時の研究状況の一端を『中国語歴史文法』『漢語史稿』(中冊)の比較を通じて見てきたが、改めて口語研究における敦煌資料の重要性とその扱いの難しさを確認することができた。同時にまだ資料が整理されず資料自体を確認することが困難であった時代に、ここまでの確に取り上げ分析された先人の業績の偉大さに再度驚かされ啓発を受けることになった。

デジタル資料の公開、影印本の出版など陸続と資料に接する研究環境は格段に良くなっている現在、ますます研究を深化させていく必要性を感じている。

注

- 1) ここでは音声言語史料として所謂口承(口碑)史料を対象としない。
- 2) 無論ここで漢字が表意文字であるなどという古い主張を繰り返す意図は全くない。現代ではその80パーセント以上が形声字であり、字構成要素に意符のほかに音符を持つのであるから、広義には一部表音文字の特徴も備えているとも言えなくもないが、音のみを表記するアルファベットやハンゲルのような表音文字とは根本的に異なる。
- 3) 1924年の原序に“当我做歸納的研究工作时，常守着一個規則：“例不十，不立法”；……”とある。
- 4) 「序例」に「此篇既多修正馬書之處，以限於教本體例，未能盡述理由。讀者可取拙著馬氏文通干誤參合觀之，始知區區改正之心，良非得已。」とあり、『馬氏文通』の誤りがあまりに多く、テキストの紙幅の関係上その理由まですべて記す事が出来なかったので、自著『馬氏文通干誤』を参照してほしいと述べている。
- 5) 『中国語歴史文法』「あとがき」に「文法の歴史的研究に役立つ資料の目録は呂叔湘氏の『漢語語法論文集』の巻末の引書目録がよい参考となる。」(412頁)とある。
- 6) ドイツ文学専攻を希望されていたところ、京都の漢学者であった祖父のあとを継ぐようにとの父の強い意向を受けて支那語学・支那文学専攻に進まれた。
- 7) 講演記録は『週刊東洋學』56(東北大学中国文史哲研究会 1986)に掲載されている。
- 8) Ruth Fuller SASAKI, Yoshitaka IRIYA, “The Recorded Sayings of Chi’an Master Lin-chi Hui-chao of Chen Ore lecture” (1974)

- 9) 詳しくは書評（『中国文学報』第1冊 1954）参照
- 10) 原注によれば『史通』に引用される『漢書 張蒼傳』の“年老口中無齒”に対して“年”“口中”の三字が省略可能だと批判されたことをいったもの。
- 11) 「清暑」を左から右へ「清」の声母と「暑」の韻母を組み合わせて「楚」、逆に右から左へ「暑」の声母と「清」の韻母を組み合わせて「声」とし「楚声」とするような後世の反切につながる音遊びをいう。
- 12) この個所の原文は次の通り：
從漢以後的情況看來，詩歌往往比散文更接近口語。古詩十九首就是很淺白通俗。六朝的民歌，在駢文盛行的同時，更是漢語史的主要根據。唐文和唐詩相比，接近口語的程度相差太遠了。到了宋代，找口語不要向詩中找，而應該向詞中找；到了元代，找口語不要向詞中找，而應該向曲中找。
唐代的變文，宋元的話本，明清的小說，都是漢語史的極端寶貴的材料。隋唐以後佛教的語錄，宋以後儒家的語錄，也都可以參考。
研究散文的目的，就漢語史來說，是研究某一時代的語法和詞彙。至於研究韻文，除了研究它的語法和詞彙之外，還可以研究韻母和聲調。甚至於聲母也有可能被發現；例如六朝人喜歡說“反語”，“反語”裏面表示分析了聲母和韻母；韻文中偶然有“雙聲詩”，“雙聲詩”裏面也表示分析了聲母。在歷代史料中偶然也有一些“雙關語”和忌諱語，“雙關語”是用同音詞“雙關”的，忌諱語也往往因通音而忌諱，我們可以由此考見古音。總之，漢語史的根據是多方面的，漢語史的材料是非常廣泛的。（23-24 頁）
- 13) 『中国語歴史文法』に取り上げられる用例に関する詳しい検討は「敦煌文献與中國口語史研究——以太田辰夫《中國語歴史文法》為中心」（《敦煌吐魯番研究》第14卷 2014, 537-552）にまとめてあるので参照されたい。

参考引用文献

- 馬建忠（1898）『馬氏文通』漢語語法叢書版 1984年 商務印書館
楊樹達（1934）『高等国文法』漢語語法叢書版 1984年 商務印書館
呂叔湘（1954）『漢語語法論文集』漢語語法叢書版 1984年 商務印書館
周紹良（1955）『敦煌變文彙錄』（上海出版公司）
王力（1957-8）『漢語史稿』上冊中冊 科学出版社
王重民他（1957）『敦煌變文集』人民文學出版社
太田辰夫（1958）『中国語歴史文法』江南書院
蔣紹愚他譯（1987）『中国語歴史文法』（中文版）
Chao Yuen Ren. 1968 A Grammar of Spoken Chinese Berkeley: University of California Press

